

## 讃岐国における西行の足跡

——崇徳院との関わりを通して——

吉 原 彩

### 一 はじめに

百人一首には、大きく分けて二つの遊び方があると思う。一つは、競技カルタに代表される、読み手が読んだ札を早い者勝ちで取る遊び方である。もう一つは、正式に百人一首をやっている人から見れば、邪道かもしれないが、いわゆる「坊主めくり」という遊びだ。読み札を裏返しに積んで、坊主の札を引くと、手持ちの札をすべて失うというあの遊び方だ。そのため、坊主の札は必然的に嫌われてしまう。しかし、ここではその嫌われる「坊主」に焦点を当ててみたいと思う。一口に「坊主」と言っても、百人一首には総勢十三人の「坊主」が登場する。その「坊主」のなかでも、

歎けとて月やはものを思はするかこち顔なるわがなみだかな  
で有名な、西行を取り上げようと思う。そして、西行にとって痛切に惜しまれた崇徳院、そしてこの二人を結びつける土地・讃岐を中心に考えてみようと思う。

### 二 西行の生涯

西行は、俗名を佐藤義清といい、家門は藤原北家に連なる。元永元年（一一一八）に生まれ、若い頃から、武勇にすぐれ、徳大寺家の隨身となり、鳥羽院のもとで北面の武士として仕えた。しかし、保延六年（一一四〇）、官位も妻子も捨てて、二十三歳で出家する。これは、彼の人生における大きなターニング・ポイントであった。出家を決意した西行は、その時にこのような歌を詠んでいる。

世にあらじと思ひ立ちけるころ東山にて人々寄霞述懐ということ  
をよめる

空になる心は春の霞にて世にあらじともおもひたつかな

出家を決意したものの、心には霞という名の迷いが生じているという状態を詠んでいる。やがて、出家を固く決意し、出家後は、都の近郊、高野山、伊勢、吉野、四国の善通寺などに草庵を結び、遁世生活を送る。その間に陸奥へ二度、四国へ一度大きな旅を試みた。そして文治六年（一一九〇）に、河内国石川郡弘川寺で七十三年の生涯を閉じる。

### 三 西行と桜

西行は、無類の桜好きである。花を歌った詠歌は二三〇首にも及ぶため、「花狂いの歌人」とも呼ばれている。歌に詠むだけではなく、吉野に草庵を結んだのも、吉野が桜の名所だったからに相違ないだろう。京都の西山にある、勝持寺という通称「花の寺」と呼ばれる寺で、出家して間もない西行は、こんな歌を詠む。

しづかならんと思ける頃、花見に人々まうできたりければ  
花見にと群れつつ人の来るのみぞあたら桜の科には有ける

桜は大変結構だが、人が騒々しく寄ってくるのが困る、という歌だ。出家後間もない西行は、まず、民衆（俗世）から離れる事を考えたはずだ。そのため、こんな人を突っぱねるような歌を詠んだのではあるまいか。しかし、これは本心ではなく、あれだけ桜が好きで西行は、少なからず、多くの人に桜が愛されている事が、嬉しかったに違いないと思う。

さらに、西行は自身の最期に関して、この歌を詠んだ。

花の歌あまたよみけるに

願はくは花の下にて春死なんその二月の望月の頃

この「二月の望月の頃」というのは、釈迦入滅の日（二月十五日）を意識したものである。実際の西行の最期は、弘川寺の桜の木の下で、二月一六日に亡くなるという、ほぼこの歌通りの往生で、民衆を驚かせた。また、西行は自身の死後についても歌を残しており、

花の歌あまたよみける

佛には桜の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば

自身の死後までも、桜の花を欲し、歌として詠むことで、その気持ちの強さがうかがえる。生前にこんな歌を残した西行の心境とは、どのようなものだったのだろうか。おそらく長く続く遁世生活の寂寥感がこのような歌を作らせたのではないだろうか。

このように、西行の桜好きは、残された多くの歌に裏づけされたものであり、この話が、さまざまな文学へ伝播していった。その例が、世阿弥作（金春禅竹の作とも）の謡曲「西行桜」であったり、「西行物語」であったり、「撰集抄」なのである。

### 四 崇徳院の生涯

崇徳院は、母に藤原公実の女・待賢門院璋子を持ち、鳥羽天皇の第一皇子として、一一一九年に生まれた。しかし、実は白河法皇と待賢門院との間の子だとする説もある（古事談）。そのためか、白河上皇からは可愛がられるが、鳥羽天皇からは「叔父子」とさえ呼ばれ、あまりよく思われていなかったようだ。案の定、保安四年（一一三三）、白河法皇のご意向によって、崇徳天皇は五歳で践祚した。しかし、大治四年（一一二九年）白河法皇が崩御し、鳥羽院の院政が始まると、鳥羽院は美福門院得子を迎え、保延五年（一一三九）には、皇子鉢仁親王がご誕生された。そして、永治元年（一一四一）、崇徳天皇には当時一の宮である重仁親王がいたが、鳥羽院の強いご意向で、鉢仁親王が践祚し、近衛天皇となり、崇徳は新院と呼ばれることとなる。ちょうどこの年に作られた歌が、百人一首に取られている。

瀬をはやみ岩にせかる、瀧川のわれても末にあはむとぞ思ふ

この歌は、恋愛の歌として、詞花和歌集に取られているが、「われても末にあはむ」のは、この時期に作られたのならば、恋人ではなく、泣く泣く手放してしまった皇位ともとれるのではないかと思う。または、恋人と、皇位をかけているとも考えられる。

その後、やはり、鳥羽院と衝突し、鳥羽院の崩御後には、後白河天皇との主導権争い（保元の乱）があったことは、周知のことだろう。そしてこの戦いに敗れた崇徳院は、保元元年（一一五六）に讃岐へと配流され、讃岐で八年と一ヶ月を過ごした後、長寛二年（一一六四）、無念のうちに、崩御する。

## 五 西行と崇徳院との関係

そもそも、西行はなぜ、崇徳院に近い感情を持ったのか。これには、徳大寺家という家が大きな鍵を握っている。徳大寺家の祖は、藤原実能である。この人物は金葉和歌集に歌がとられている歌人であり、待賢門院璋子の兄にあたる。そしてその父は前記したとおり、藤原公実で、同じく歌人である。そのため、徳大寺家は和歌を好む風潮が強い一門であった。縁に関しては、父祖以来か、西行本人からか、またいつ頃仕えたかなど、不明な点が多い。しかし、鳥羽院の元で、北面の武士として仕えたのは、前記した、徳大寺家が関係していることは明らかである。

鳥羽院の中宮、つまり、崇徳院の母后にあたる待賢門院璋子は、この徳大寺家の出である。おそらくこの関係からすべてが始まったのだ。西行の生涯と、崇徳院の生涯を見るとわかるが、彼らは年齢がひとつしか違わない。そのため、身分は違えど歌を通して、お互い通じあうところも多かったのではないだろうか。

## 六 西行の四国行脚

西行は、仁安二年（一一六七）、自身五十歳の冬に、念願の中国、四国地方への旅を決心し、出発した。なぜ念願だったのかと言うと、その理由は二つある。一つは、一一六四年に配流先の讃岐で崩御した、崇徳院の白峯御陵に参拝したかったからである。もう一つは、弘法大師の生誕地の善通寺に参詣し、その遺跡を巡りたかったからだと考えられている。西行はまず、三野津という港に上陸する。そこでこんな歌を詠む。

讃岐の国へまかりて、みのつと申す津につきて、月あかくて、ひびのても通はぬほどに、遠く見えわたりたりけるに、水鳥のひびのてにつきて飛びわたりけるを

しきわたす月の水をうたがひてひびのてまはるあちの群鳥

月光を氷と錯覚して飛び回る、あちの群れを詠んでいる。月を氷と比喻する事は常套的ではあるが、この歌からは、西行の鋭い感性を感じさせられる。

その後、西行は松山の津、そして崇徳院が一時的に籠められていた、雲井の御所に行ったとされている。松山の津は、崇徳院が配流されたときに上陸した土地である。ここではこの二首を詠んでいる。

さぬきにまうでて、まつやまのつと申所に、院おはしましけん御あとたづねけれど、かたもなかりければ、

まつ山のなみなながれてこしふねのやがてむなしく成にける哉  
まつ山のなみのけしきはかはらじをかたなく君はなりましにけり  
一首目の「こしふねの」は、崇徳院が配流されて上陸したのが、この松山の津であるということが暗示されている。さらに、「やがてむなし

く成にける哉」とあり、これは崇徳院の退位の暗示である。そして、この二首の詞書に「院おはしましけん御あとたづねけれど、かたもなかりければ」とある。崇徳院が崩御されたのは、長寛二年（一一六四）のことで、西行が讃岐を訪れたのは、仁安二年（一一六七）のことである。崩御から、三年しか経っていないにもかかわらず、すでに、崇徳院がいらっしゃった場所には、その痕跡もないことが書かれている。この詞書により、波乱に満ちた時代の時の流れの速さというものは、こんなにも早いものなのかという、無常観を感じずにはいられない。

そして、崇徳院の御陵がある、白峯寺へ行き、崇徳院の御陵の前にして、西行はまた歌を詠む。

しらみねと申しける所に、御はかの侍りけるにまいりて

よしや君昔の玉のゆかとてもかからむ後は何にかはせむ

この歌は「よしや君」で、一句切れとなっており、崇徳院への呼びかけのように感じられる。歌の意味は、たとえあなたは、昔は立派な天皇の位でいらっしゃったとしても、こうして亡くなってしまった後は、もうどうしようもないことだから、安らかにご成仏してください、である。崇徳院といえど、怨霊で有名であるが、この西行の四国行脚とほぼ時を同じくして、その噂がささやかれはじめた。この強い語調は崇徳院への鎮魂歌にほかならないだろう。崇徳院の無念の心を思う西行の激しい情念や、息遣いが強く伝わってくる歌である。

## 七 おわりに

西行について調べていく中で、私はこのレポートで取り上げた勝持寺と、白峯寺に実際に足を運んでみた。すると、やはり文献などから考え

たこととは違った印象を受けたり、別の解釈を見つかったり、さまざまな発見ができた。勝持寺は、山の上の方にあり、寺にたどり着くまでかなり距離があった。俗世から離れようとしていた出家直後の西行が選んだ寺として納得がいくものであった。そして、白峯寺に登る山道からは瀬戸内海が見え、この瀬戸内海は今も昔も変わらずに、多くの旅人を見てきたのだと感じた。このように様々な事を、実際に足を運ぶことによって感じた理由は、他の誰でもない、西行という人物を取り上げたからに他ならないと思う。西行は「漂泊の歌人」と呼ばれるだけあって、彼が経験した旅や、遁世生活が、彼の感性を形成し、歌を紡いだからだと思う。彼が感じた、人間の営みのはかなさや、運命の辛さは、日本人の心に今も深く根付いていて、それが、西行が八〇〇年の時を越えて、現在も日本人に愛される所以なのだと思う。

## 参考文献

- ・安田章生『西行』彌生書房 一九八三年
- ・久保田淳『草庵と旅路に歌う西行』新典社 一九九六年
- ・目崎徳衛『百人一首の作者たち 王朝文化論への試み』角川書店 一九八三年
- ・高木きよ子『西行 捨て果ててきと思ふ我身に』大明堂 二〇〇一年
- ・伊藤嘉夫『歌人西行』鷺の宮書房 一九五六年
- ・岡田陸『歌碑が語る西行』三弥井書店 二〇〇〇年
- ・岡田陸『西行伝説を探る 西日本を中心に』二〇〇二年
- ・磯野實『保元伝承選歌集 西行法師のみち歌碑群とその解題』西行のみち事務局 二〇〇四年
- ・玉城徹『西行―「山家集」の世界』砂子屋書房 一九八九年
- ・窪田章一郎『西行の研究』東京堂出版 一九六一年

- ・稲田利徳『西行の和歌の世界』笠間書院 二〇〇四年
- ・中村直勝『中村直勝著作集六』淡交社 一九七八年
- ・山田雄司『崇徳院怨霊の研究』思文閣出版 二〇〇一年
- ・高城功夫『西行の研究―伝本・作品・享受』笠間書院 二〇〇一年
- ・饗庭孝男『西行』小沢書店 一九九三年
- ・白洲正子『西行』新潮社 一九八八年
- ・森重敏『西行法師和歌購読』和泉書院 一九九六年
- ・小峯和明『西行と聖地―四国の旅から』〔解釈と鑑賞〕六十五―三 二〇〇〇年
- ・後藤重郎『西行の西国旅行の歌に関する一考察―特に中国地方より四国への舟路の折の詠をめぐって』〔中京大学文学部紀要〕三十二号 一九九八年
- ・山本晃司『西行と崇徳院』〔国語国文学〕三十二号 一九九三年
- ・木村ゆかり『西行の「月の歌」について―崇徳院・定家との関わり』〔国語国文論集〕一六号 一九八七年